

スポーツ場面のコーチングにおける選手・コーチ間のコミュニケーションに関する社会学的研究
フットサルのコーチングに着目して—

順天堂大学大学院
スポーツ健康科学研究科
学籍番号：4119007
氏名：小畑 慎治

【目的】

これまでのコーチングに関する文献では、コーチングの理念や練習メニューについては豊富に述べられているが、指導現場の具体的な相互行為については詳しく述べられていない。実際の指導現場では何が行われているのかについて本研究では、実際のスポーツの指導現場を観察し、コーチングの具体的な相互行為のあり方を記述する中で、具体的なコーチングの方法を明らかにすることを目的とした。本研究は、コーチングの得手不得手や、トレーニングメニューの効果を検討するものではなく、コーチング実践の相互行為を観察し、どのようにコーチや選手にコーチングが理解されているかを検討するものである。

【方法】

本研究では関東2部で活動するフットサルチームを対象に、練習中に行われるコーチが行うコーチング、すなわち選手とコーチの相互行為を記録するため、その練習の様子についてビデオ撮影を行った。特に、練習中において指導者が練習の流れを一旦止めて、選手たちに何らかの指示を行う練習の「訂正場面」に着目した。2台のデジタルビデオカメラを用いて撮影を行い、1台は対象チームが普段から練習風景を撮影しているデジタルビデオカメラを使用した。もう1台は、コーチの様子を撮影するコーチ専用デジタルビデオカメラを設置した。通常の練習状況を保つための配慮として、コーチ専用カメラは対象チームのメンバーに協力をいただき、コート外からの撮影を行った。

【結果】

本研究では、スポーツ指導の修正実践において、①修正の開始、②間違いの提示、③解決策の提案という連鎖を確認することができた。この上記連鎖を「基本連鎖」とした。「基本連鎖」に続くような形で④間違いの提示、⑤解決策の提案という連鎖も確認することができた。「基本連鎖」に続く連鎖を「拡張連鎖」とした。

上述した修正実践の連鎖のうち、②間違いの提示、③解決策の提案でコーチが選手にプレイを可視化する方法が2つ確認できた。コーチが修正実践で行う可視化の方法は、身体を用いたデモンストレーション、または、作戦盤を用いた可視化であった。これらの可視化には修正を行う際の状況に関係し、「修正対象の人数」、「修正するプレイ数」、「修正のタイミング」によって用いられ方が変わっていた。

【結論】

本研究ではスポーツ指導の「修正連鎖」に加え、対象によってプレイの可視化方法が異なることが明らかになった。抽象的に述べられてきたコーチングの方法に対して、具体的に述べられることでコーチングを行う人の指針とすることができる。また、コーチングの実践を記述し分析した本研究の結果は、これからコーチングを始めようとするものや、コーチングを学ぶ学生にとって、コーチング実践の具体的な説明となる。本研究は、コーチングの方法を具体的に観察し相互行為の視点、つまり社会学の視点によるコーチング研究の先駆的な意義を持つと考えることができる。